

平成十六年度 二松學舎大学人文学会役員（五十音順）

会 長	野 村 邦 近
運営委員長	川久保 廣 衛
運営委員	家 井 眞・磯 水 絵 小 川 晴 久・五 井 信 （武 永 尚 子）
研究委員長	磯 水 絵
研究委員	家 井 眞・小 渕 朝 男 佐 藤 保・芹 川 哲 世 高 柳 幸 雄・寺 山 葛 常 源 川 進・矢 羽 勝 幸
編集委員長	小 川 晴 久
編集委員	浅 野 進 太・五 井 信 椎 木 伸 治・白 藤 禮 幸 林 謙 太 郎・山 口 直 孝 横 須 賀 司 久・渡 辺 了 好
会 計	武 永 尚 子
会計監査	難 波 正 久・松 田 存

△編集後記▽

本号はいつもより薄目になってしまったことを編集委員長としてお詫びしたい。しかし本号には小論文が二つ採用されており、在籍中の学部学生さんのものや卒論をふまえたもので、会員の大多数を占める学部学生さんの投稿が増えていく兆しとしてよろこばしい。ただ本学の専任教師以外の投稿は査読によるチェックをしているので、院生、学部学生の投稿の成否は査読にかかっている。本学教師はますく多忙となっているため、査読に三週間位の時間がほしいという強い要望も寄せられている。六月の総会で五月末の投稿原稿締切りを延ばしてほしい旨の要望が出されたが、査読、再査読と時間をかける必要が現実に出ているので、延ばすのは難しいのではないかと考えている。

本号がお手元に届く頃は終了しているが、本学は今年の八月二八・二九日漢文教育をめぐる国際シンポジウムを開催する。また七月二二日本学が平成16年度「21世紀COEプログラム」研究教育拠点の一つに選ばれたことを各紙は一斉に報道した。「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」としてである。今後このような実践の報告や成果が本誌に陸続と発表されていくとよいのではないかと考える。日本の漢文教育は新しい視点で再興されなければならない。まず本学で使う漢文教科書の編纂が期待されるが、中国、朝鮮、日本の各分野からどのような漢文をどのような視点で選択するか、大いに論議されてよい。暗誦がキーワードとなり、暗誦にたえるものという基準も加わって。その実践は本誌を活性化させるであろう。

編集委員長 小川晴久